

入選 高学年の部

母の魔法に感謝をこめて

「お母さん、お腹すいたあ〜!」「ただいま」の代わりに、そう言いながら玄関のドアを開けると、「おかえり」と言う母の声と共に、美味しそうな匂いが私の鼻をくすぐった。私は、この瞬間が何よりも大好きだ。家に帰って来たんだなあという安心感が私の身体を優しく包み込んでくれるからだ。食卓に出される母の手料理は、特に見映えが良い訳でも、手の込んだ料理でもない。けれど、どんな高級料理よりも美味しく私をホッとさせてくれる。母の魔法の最たるものだ。

それ以外にも、母の魔法は昔からあった。二千グラム足らずの未熟児で生まれた私は、二才を迎える頃に病院で小児ぜん息と診断され、それ以来、何度も発作をくり返してきた。そのほとんどは夜中から明け方にかけて起きることが多く、その度に母は、私を抱き起こして何時間も背中をさすってくれた。幼い私は、まだ上手に吸入器から薬を吸い込むことが出来なかったが、母は手動式の吸入器を使って、辛抱強く私に薬を与え、呼吸が落ち着くまで私の背中をさすり続けてくれた。

「大丈夫、大丈夫!」まるで、おまじないの様に何度もつぶやく母の声と手の平のぬくもり。母に守られているという安心感が何よりも心強かった。不思議と少しづつ呼吸が薬になつて、眠りにつくことが出来た。紛れもなく、母の魔法だった。

小学校に入学してからも、低学年の頃はぜん息の発作が起

千葉県

国府台女子学院小学部六年

渡部 優依花

きる度に、母が学校への送り迎えをしてくれた。片道、電車を乗りついで四十分の登下校。私が足をけがした時は、ランドセルや荷物を持った上に、私を背負って駅の階段を登り下りしてくれたこともあった。自分自身もぜん息の持病を持つ母にとって、相당한負担だったに違いない。そんな時も、母は嫌な顔ひとつせず、逆に私を励ましてくれた。六年生の今まで、母は共に笑い、考え、時には一緒に悩んでくれた。そして、いつも勇気付けてくれた。母は私の一番の理解者だった。そんな母と最近、さ細なことで口げんかになり衝突することが多くなってしまう。こんなふうになんか言いつもりじゃなかったのに……と思いながら、反射的に「うるさいな。」と反発してしまう。悲しそうな母の顔を見て、しまった!と思いながら、どうしても素直になれない日々が続いていた。

そんな中で、あの三月の東日本大震災が起きた。母は、私をすばやくテーブルの下に押し込み、毛布で私を包んでくれた。おびえる私を抱き寄せ、いつもの様に「大丈夫、大丈夫!」と何度もつぶやいて、背中をさすってくれた。私は母の魔法の中で、守られていた。

震災は、私に大切なことを思い出させてくれた。いつも私のことを一番に考え、守ってくれる母。魔法は全て母の愛から生まれていた。今度は私の魔法で母を笑顔にしよう。「お母さん、ありがとう。」と、感謝を込めて。